

卒業前教育プログラムにおける看護技術の習得

キーワード: 卒業前教育、看護技術、新人看護師、職場不適応、リアリティショック

○柄澤清美、和田由紀子、清水理恵、小島さやか、倉井佳子、菅原真優美
新潟青陵大学

I 目的

近年、医療現場において、新人看護師の職場不適応による離職の増加やリアリティショックが問題視されているが、その原因として、看護技術に関するストレスの高さ¹⁾が指摘されている。P 大学ではそのような状況を改善しスムーズな職場適応が図れるように、希望者を対象に技術演習を中心とした卒業前教育プログラムを行っている。

本稿では、演習参加者の看護技術習得度を中心に、デモンストレーションの有無を含む教育プログラムの効果と課題を検討する。

II 方法

1. 研究対象

P 大学看護学科 4 学年に在籍し、3 月に当該教育プログラムを受講した学生 110 名(2010 年度n=66, 2011 年度n=44)。

2. 研究方法

当該教育プログラムの内容に準じ、看護技術の演習前後の習得度の比較や練習回数、受講後の感想について無記名・自記式の質問紙を作成し、プログラム終了時に配布・回収した。演習した技術は、注射準備、輸液の実施と管理、尿道留置カテーテル留置、口鼻腔および気管内吸引、経管栄養、静脈血採血の 6 項目である。教員の指導方法が 2010 年度はデモンストレーションしたのに対し、2011 年度は行わない形にしたが、指導内容と評価基準は同じである。

習得度は、「助言がなくてもできる・助言があればできる・方法はわかるが出来ない・方法がわからない」の 4 段階評価で自己評価し、4 検法の上位と下位の差を検討した。

3. 分析方法

各看護技術項目に対して、演習前後の習得度について t 検定($p < .05$)を実施した。さらに各年度の演習前の指導方法による習得度の違いを検討するために、年度別の演習後の習得度について、ウィルコクソンの順位と検定($p < .05$)を行った。また、練習回数と看護技術習得度の関係、看護技術習得度と演習成果の自覚との関係を見るためにピアソンの相関係数を出した。

4. 倫理的配慮

研究対象には、質問紙の配布時および質問紙の冒頭に、研究の主旨、協力の自由意思と匿名性の保証、協力拒否による不利益の回避、研究結果の学術的な目的に限定した使用について説明したこれを順守した。協力への同意は回答をもって得たものとし、回収には所定の回収箱を使用した。

III 結果

質問紙の回収数 85 (回収率 77.0%)、有効回答数 85 (有効回

答率 77.0%)であった。また、演習期間中の各看護技術項目の平均練習回数は、注射準備 3.8 回、輸液の実施・管理 4.9 回、尿道留置カテーテル留置 3.4 回、口鼻腔吸引・気管内吸引 3.5 回、経管栄養 3.1 回、静脈血採血 5.9 回であった。

看護技術の演習前後の習得度では、全ての項目で演習後に有意に上昇し(注射準備;t(77)=12.6, 輸液の実施・管理;t(78)=13.3, 尿道留置カテーテル留置;t(75)=14.2, 口鼻腔吸引・気管内吸引;t(76)=14.3, 経管栄養;t(76)=12.0, 静脈血採血;t(77)=12.9, いずれも $p < .05$)、「助言がなくてもできる・助言があればできる」とほぼ全員が回答した。

年度別の比較では、デモンストレーションを行わなかった 2011 年度(n=32)の方が、2010 年度(n=53)に比べ静脈血採血で有意に習得度が高かった(W=899.5, 漸近有意確率.007)が、他の 5 項目では有意差はみられなかった。また、練習回数と技術習得については、輸液管理($r = .21$)に弱い相関がみられるのみだった。

演習成果の自覚については、81.2%が「技術に対する不安が少なくなった」と答え、96.5%が「就職の心構えになった」と答えた。「技術に対する不安がなくなった」と演習後の各看護技術の習得度の関係では、すべての項目について $r = .21 \sim .30$ の弱い正の相関が認められた。

IV 考察

技術習得度の有意な上昇と技術への不安減少により、卒業前教育プログラムが有効であることが示唆された。技術習得度が上がるほど不安減少につながっていることから、技術を体験し、なんとなく思い出すことだけで不安が軽減するのではなく、技術習得の自信が不安をより軽減させるとわかった。デモンストレーションをなくしたほうが主体的に学び習得度が上がるのではないかと期待したが、静脈血採血のみにしか影響は見られておらず、効果は部分的であった。

看護技術の習得には反復練習が必要であるが、限られた時間で十分な機会を提供することは困難である。意味のある練習ができるための方策について、今後さらに検討していく必要がある。

V 結論

卒業前教育プログラムは、看護技術の習得に有効であり、就職への不安の軽減には、技術習得の自信が関与していた。

引用文献

1) 神群博・田村文子. 新卒看護婦の職場適応過程にみられる心理的ストレスに関する研究. 富山医薬大医誌. 1996;9(1): 49-53.